（財）大阪府文化財センター調査報告書　第134集

茨木市

福　井　遺　跡

大阪第二警察病院増築工事に伴う福井遺跡０４－１調査報告書

２００５年9月

財団法人　大阪府文化財センター

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第134集

茨木市

福　井　遺　跡

大阪第二警察病院増築工事に伴う福井遺跡04－１調査報告書

財団法人　大阪府文化財センター

1．調査区遠景（南より）

2．調査区遠景（東より）

1．出土埴輪

2．出土埴輪

序　　文

茨木市福井はおだやかな丘陵、あるいはその前面に展開する水田地帯に紫金山、南塚、青松塚、海北塚といった著名な古墳が点在する地として考古学史にその名を留めて参りました。また福井遺跡の南を流れる勝尾寺川の流域は『勝尾寺文書』によって中世社会の動向を具体的に追究できる地として、文献史学上において大変重要視されてきた地でもあります。

福井遺跡は2000年に実施された府営住宅建替工事に先立つ確認調査で遺物が出土したことによってその存在が初めて明らかになった遺跡です。従って古くから人々の耳目を引いていたというわけでは決してありませんが、その後行われた大阪府教育委員会の調査で弥生時代、古墳時代さらには平安、鎌倉時代の土器が多く出土し、長期にわたって集落が展開していたことが判明するなど、その性格は近年急速に明らかになってきています。

今回の調査では、一点に過ぎませんが皮切具と推定される石匙が出土し、福井遺跡の初源が縄文時代に遡ると同時に、当地が狩猟場として利用されていた時代のあったことを新たに知り得ることができました。注目すべき遺物としては埴輪があります。残念ながらそれらはいずれも原位置を留めるものではありませんでしたが、府下ではあまり類例を見ない須恵器製作の技法を用いた硬質の埴輪が認められることは、先に触れた福井の古墳文化がより複雑な様相を呈していたことを示唆しており、今後の研究に波紋を投げかけることは間違いありません。また調査区のほぼ全面に広がっていたと見られる耕作痕からは鎌倉時代を中心とした中世前半に進展した畑作地としての開発の一端が窺えます。

このように現在は水田の広がる中に旧来の村落と新興の住宅地が混在する福井遺跡周辺でありますが、かつては狩猟の場として、集落として、墓域として、さらには畑作地として、実に多様な土地利用が展開していたことが数次の調査によって明らかになって参りました。環境問題が叫ばれる昨今、大地に刻まれた先人の営みからなにを教訓として汲み取るか、現代に生きる私たちにはその叡智が試されているような気がしてなりません。

調査に際しましては大阪府教育委員会文化財保護課、財団法人 大阪府警察協会並びに地元関係者各位には、多大な御指導、後協力をいただきました。記して感謝するとともに、今後とも当センターの事業に一層の御支援を賜るようお願いする次第です。

2005年９月

財団法人　大阪府文化財センター

理事長　　水　野　正　好

例　　言

1．本書は大阪府茨木市室山１丁目所在大阪第二警察病院増築に伴う福井遺跡04—１の発掘調査報告書である。

2．現地における発掘調査は（財）大阪府警察協会の委託を受け、2004年12月１日から2005年２月28日まで大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと（財）大阪府文化財センターが行った。遺物整理及び報告書作成作業は現地調査に引き続いて2005年３月１日から2005年６月30日まで（財）大阪府文化財センター中部調査事務所において実施した。

3．福井遺跡の現地調査及び遺物整理・報告書作成作業は、調査部長玉井 功（2005年４月１日より同赤木克視）、調整課長赤木克視（2005年４月１日より同田中和弘）、調整係長森屋直樹（2005年４月１日より同芝野圭之助）、中部調査事務所長小野久隆、および同調査事務所調査第一係長辻本武（2005年４月１日より同松岡良憲）のもと調査第一係技師山元 建が担当した。また遺物の写真撮影は中部調査事務所主査片山彰一（写真担当）が行った。

4．本書の執筆にあたっては一瀬和夫・宮崎泰史・横田 明（大阪府教育委員会）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、田中晋作（池田市立歴史民俗資料館）、福永伸哉・寺前直人（大阪大学）の諸氏に有益な御教示を賜った。記して感謝の意を表する。

5．現地調査・遺物整理においては池田美香、奥村弥恵、栗牧奈緒子、高田泰子、中村慎子、松岡聖美、宮本史子、山本香織の諸氏の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

6．口絵の調査区遠景写真２葉及び周辺遺跡分布図に関しては大阪府教育委員会の提供を受けた。それ以外の調査にかかる写真、ネガフィルム、カラースライド、さらに出土遺物、実測図面類等の全資料は（財）大阪府文化財センターで保管している。各方面での幅広い活用を希望する。

凡　　例

1．調査にあたっては国土座標第Ⅵ系を基準に（財）大阪府文化財センターが遺跡調査基本マニュアルに定めた地区割法に準拠し、その詳細は第Ⅲ章に記述した。遺構平面図には国土座標第Ⅵ系の座標値をＸＹ軸についてｍで表示し、単位は省略して数値のみを記載した。

2．使用測地系は世界測地系（測地成果2000）である。

3．遺構実測図の方位は、国土座標に基づく座標北を示す。なお座標北を基準とした場合、調査区周辺の磁北は6°9′28″西に、真北は0°15′32″東に偏位する。

4．標高には全てT.P.（東京湾平均海面）＋値を使用したが、＋を省略表記している。

5．遺構番号は遺構の種類とは関係なく、調査時点での検出順に１からの連番号を付与した。同一番号が異なる遺構に付与されることはなく、その番号は基本的に本書でも踏襲している。

6．遺構はその種類の前にその番号を表記した（例；11溝）。

7．遺物番号は遺物の種類と関係なく連番としている。

8．遺物実測図の縮尺は埴輪1/3、土器1/4、石器2/3とした。なお土器実測図の断面については、須恵器は黒塗りつぶし、瓦器はスクリーントーンで各々表現した。

9．調査、整理にあたって土色・土器の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1999年版を基準として記録を行った。埴輪の色調は他の諸特徴とともに遺物観察表に記載した。

10. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は全て一致する。

巻頭図版目次

巻頭図版１　１．調査区遠景（南より）
　　　　　　２．調査区遠景（東より）
巻頭図版２　１．出土埴輪
　　　　　　２．出土埴輪

目　　次

序　文
例　言
凡　例

第Ⅰ章　位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 2
第Ⅱ章　既往の調査 …… 4
第Ⅲ章　調査に至る経緯・調査方法
　第１節　調査経緯 …… 5
　第２節　調査方法 …… 5
第Ⅳ章　調査の成果
　第１節　調査の概要 …… 7
　第２節　検出遺構 …… 13
　第３節　出土埴輪 …… 16
第Ⅴ章　まとめ
　第１節　古墳時代 …… 21
　第２節　中世以降 …… 22

挿 図 目 次

第１図　周辺地質図 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図 …… 2
第３図　調査区周辺 …… 3
第４図　第１次調査Ａ区遺構検出状況 …… 4
第５図　調査区地区割図 …… 6
第６図　第４調査区全体図 …… 7
第７図　基本層序模式図 …… 8
第８図　調査区全体図（第１～３調査区）…… 9
第９図　上段面南端部 …… 10
第10図　上段面２～６層断面図 …… 11
第11図　各層出土土器 …… 12
第12図　石器 …… 12
第13図　遺構出土土器 …… 13
第14図　２溝 …… 13
第15図　24段 …… 14
第16図　20溝・21土坑 …… 15
第17図　22溝 …… 15
第18図　出土埴輪（１）…… 16
第19図　出土埴輪（２）…… 17
第20図　出土埴輪（３）…… 18
第21図　出土埴輪（４）…… 19

表 目 次

第１表　出土埴輪観察表 …… 23

図 版 目 次

図版１　１．調査区西部（第１調査区）全景（北より）
　　　　２．調査区北東部（第２調査区）全景（東より）
図版２　１．第４調査区（北西より）　２．上段面２～４層断面（東より）
　　　　３．上段面５・６層断面（南西より）　４．20溝・21土坑（南より）
　　　　５．21土坑断面（南東より）　６．21土坑（南東より）
　　　　７．22溝（北東より）　８．24段（南より）
図版３　１．埴　輪　２．須恵器
図版４　１．磁器・瓦器・土師器　２．石器

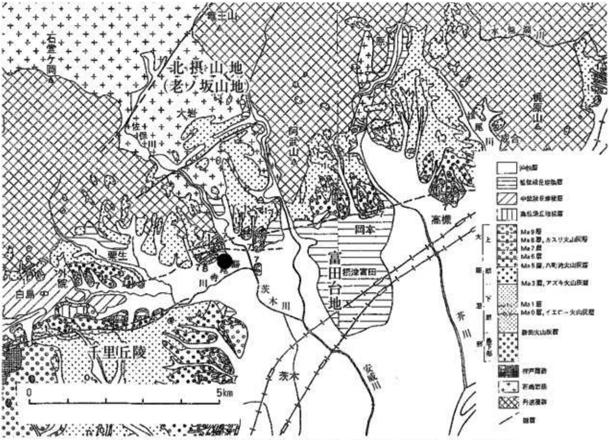
第Ⅰ章　位置と環境

第1節　地理的環境

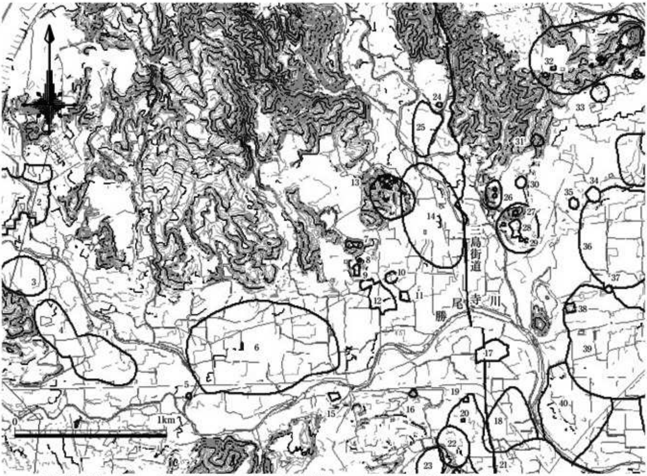
福井遺跡が所在する茨木市は大阪府の北部に位置し、南北17km、東西5kmの南北に長い市域を有している。市域の地勢は北半の北摂山地（老ノ坂山地）と、南半の大阪平野の一角を占める三島平野に大別でき、西端部には吹田市・豊中市から続く千里丘陵が広がっている。

市内にはその北摂山地もしくは千里丘陵に源を有し、流域に段丘や扇状地を発達させながら流下する幾筋もの中小河川が認められる。勝尾寺川もそれらの河川の一つである。その上流は箕面市域であるが、茨木市域を北摂山地と千里丘陵にはさまれた形で東流し、茨木川との合流後はその方向を南へと変え、神崎川に注ぎ込んでいく。[1] 福井遺跡は、勝尾寺川と茨木川との合流地点を南東に臨む、北摂山地最南端部付近に位置している。

地質学的に見ると北摂山地には古生代末から中生代前半にかけて形成された砂岩・泥岩・チャートなどからなる丹波層群が広範に広がり、佐保川（茨木川の上流）流域など一部に中生代白亜紀に形成された花崗岩類の露頭が認められる。北摂山地南端から千里丘陵にかけてはそれらの基盤層上に第三紀鮮新世末から第四紀更新世前半にかけての大阪層群が堆積し、河川の流域にはさらに更新世後半の段丘堆積層と完新世の沖積層が形成される。以上の地質学上の知見と照らし合わせると、北摂山地南端の丘陵端部とその直下の平野部に位置する福井遺跡はその北半に大阪層群が、南半には沖積層が広がる状況を見



第1図　周辺地質図（黒丸が福井遺跡　市原実編著1993「大阪層群」をもとに作成）



1 徳大寺遺跡
2 栗生間谷遺跡
3 庄田間遺跡
4 宿久庄西遺跡
5 ぼろ塚
6 宿久庄遺跡
7 紫金山古墳
8 青松塚古墳
9 南塚古墳
10 海北塚北方古墳
11 海北塚古墳
12 福井遺跡
13 新屋古墳群
14 西福井遺跡
15 国史跡郡山宿本陣
16 郡山古墳
17 中河原北遺跡
18 中河原遺跡
19 馬塚
20 茶臼塚（馬塚）古墳
21 郡遺跡
22 郡山遺跡
23 郡山城跡
24 熊ヶ谷古墳
25 福井城跡
26 真竜寺古墳群
27 将軍塚古墳
28 将軍山古墳
29 将軍山古墳群
30 将軍山第１地点遺跡
31 将軍山第２地点遺跡
32 安威古墳群
33 安威寺跡
34 大日寺跡
35 安威西垣内遺跡
36 安威遺跡
37 耳原古墳
38 耳摺古墳
39 耳原遺跡
40 五日市遺跡

第２図　周辺遺跡分布図

てとることができる。

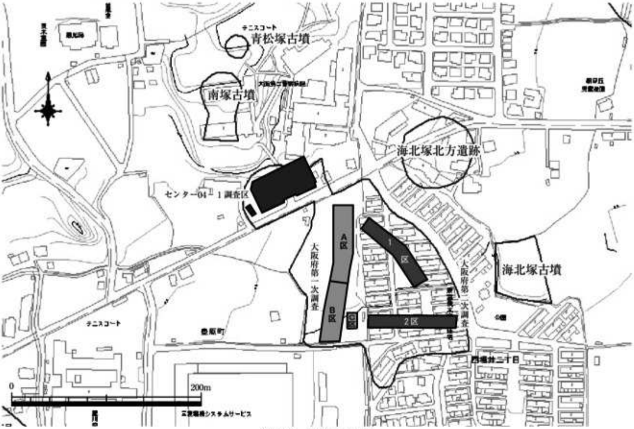
第２節　歴史的環境

以下では勝尾寺川・茨木川流域を中心とする、現在の行政区画でいうならば箕面市東端部から茨木市中西部にかけての地域の原始・古代の状況を簡単に触れておく。

勝尾寺川流域における人々の歴史は栗生間谷遺跡・庄田遺跡から出土したナイフ形石器等から旧石器時代に遡ることが明らかになっている。

縄文時代の遺跡としてはまず栗生間谷遺跡があげられ、中期前葉・後期中葉～晩期中葉・晩期後葉の土器、草創期の有舌尖頭器、早期の異形局部磨製石器のほか、サヌカイト埋置土坑（後期）を確認している。有舌尖頭器は他に栗生間谷奥・庄田遺跡でも出土しており、徳大寺遺跡では晩期後葉の住居跡を検出している。また茨木川東岸の耳原遺跡では晩期の甕棺墓が確認されている。

弥生時代に入ると西福井・耳原遺跡から前期の、庄田・栗生間谷遺跡から中期の土器片が出土してお



第３図　調査区周辺図

り、後期では宿久庄・福井の両遺跡が知られている。遺跡の分布の中心はやはり勝尾寺川下流域と茨木川流域の沖積地にあるようである。

古墳時代に入ると前期の紫金山、後期の単独墳である南塚・青松塚・海北塚、群集墳である新屋古墳群が福井地域に集中する形で確認されている。茨木川をはさんだ東岸にも多くの古墳が存在する。前期の将軍山古墳、後期の将軍塚古墳が丘陵上に築かれ、南東の段丘面上には後期の単独墳とみられる耳原・耳摺古墳が知られている。また将軍山古墳の北方に存在する真竜寺古墳群は群集墳の可能性が高く、将軍塚古墳の周辺にも後期の小規模墳が数基知られている。

このように茨木川をはさんだ両岸の古墳の状況は、前期古墳と後期の規模の大きな単独墳が認められること、群集墳が存在することなど共通点が認められる。勝尾寺川南岸の千里丘陵東端部にも郡古墳群、郡神社古墳などの後期古墳が知られているが、いずれも小規模で存続期間も限られるとみられること、勝尾寺川中・上流域では１基の古墳も現状では確認されていないことと比べるならば、茨木川東西両岸域の優位性は際だっている。なお郡遺跡や西福井遺跡では中期から後期にかけての古墳群が削平された状態で検出されており、上記諸古墳との関係が今後の課題となりつつある。

奈良時代に入ると粟生間谷・粟生間谷大日・庄田・宿久庄・宿久庄西などの諸遺跡が出現し、勝尾寺川中流域の開発の進展が窺える。また粟生間谷遺跡からは地鎮具とみられる三彩の小壷が出土している。なお律令制下では、現在の茨木市・摂津市の全域、箕面市の東部、南西部を除く吹田市域は嶋下郡に編入された。同郡には新野・宿人（久）・安威・穂積の４郷の存在が知られているが、福井遺跡周辺は新野郷、勝尾寺川流域の大半は宿人（久）郷にあたるものと考えられる。

註１）現在は安威川に合流しているが、これは近代の河川改修に伴うものである。

第Ⅱ章　既往の調査

発見に至る経緯

福井遺跡は大阪府の北部茨木市室山１丁目・豊原町・西福井２丁目に所在し、大阪府営福井住宅建て替え工事に先立つ試掘調査（2000年度実施）によって発見された。その後府営住宅建て替えに伴う事前の発掘調査が大阪府教育委員会文化財保護課によって第１次調査（2001年度）と第２次調査（2004年度）の計２回実施されている[1]（第３図）。

弥生時代

第１次調査区の南端及び第２次調査２区において竪穴住居５基等の後期の遺構・遺物を検出している。両調査区が集落の北端にあたると考えられる。なお第２次調査１区と同２区北西部は近世まで存続した谷があったため、弥生時代に限らず各時期を通じて顕著な遺構・遺物は確認していない。

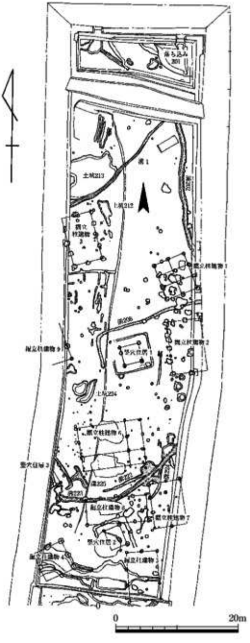
古墳時代

第１次調査区では前期の遺構・遺物も若干検出しているが、その大半を占めるのは掘立柱建物５棟、竪穴住居３基をはじめとした後期のものであり、同区が後期の集落域であったことが判明した。第２次調査区では古墳時代の顕著な遺構・遺物は確認していない。

古墳時代以降

奈良時代の遺構・遺物は確認されていない。平安・鎌倉時代は第１次調査区の北半では両時代の掘立柱建物を計４棟検出しており、集落域としての利用が確認できた。一方南半は平安時代には自然河川が流れていたが、鎌倉時代にはその機能を失い耕作地へと変化したことが判明した。第２次調査区では顕著な遺構・遺物は確認していない。

以上のように２次にわたる既往の調査では、弥生時代から鎌倉時代に至るまで断続的ながら集落が展開していたこと、鎌倉時代に耕地として利用されていたことが明らかになった。



第４図　第１次調査A区遺溝検出状況

註１）第１次調査は2003『福井遺跡』（大阪府教育委員会）を参照し、第２次調査に関しては横田 明氏のご教示を受けた。

第Ⅲ章　調査に至る経緯・調査方法

第１節　調査経緯

本調査に先立つ試掘調査が、大阪府教育委員会文化財保護課により、2003年度に実施された。[1]

試掘坑は敷地内南部の駐車場内に３箇所、看護士寮南庭に１箇所と、北に離れた本棟中庭に１箇所設定した。その結果、本棟中庭は既に削平され遺構・遺物は確認されなかったものの、敷地内南部の試掘坑より中世の遺物包含層や埴輪片を含む溝を確認したため、大阪府教育委員会は事業者である（財）大阪府警察協会に対し、工事に先立ち発掘調査が必要な旨を回答した。

現地における発掘調査は、大阪府教育委員会からの指示を受けて、（財）大阪府文化財センターが2004年12月１日から2005年２月28日まで実施し、引き続き遺物整理・報告書作成事業を2005年６月30日まで中部調査事務所において実施した。

調査地は、大阪第二警察病院敷地の南端部で、ほぼ東西に走る車道（市道宿久庄２丁目安威１丁目線）を隔てた南東側に大阪府教育委員会の実施した第１・２次調査区が位置している。

第２節　調査方法

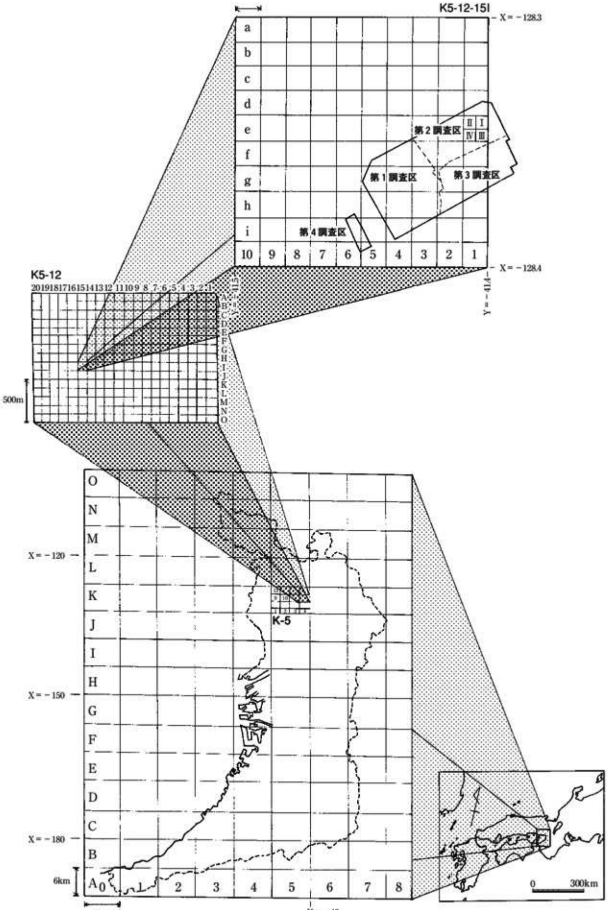
調査は掘削土の仮置場を確保する必要から全体を４分割して進めた（第１～４調査区）。近年の盛土、旧耕土を重機で除去し、それ以下の各層は人力で掘削した。

遺物取り上げや遺構の位置の特定に関する地区割りについては当センターの『遺跡調査基本マニュアル暫定版』（2003.８）に定めた方法、すなわち国土座標系第Ⅵ系を基準に100×100ｍの大区画の中を10×10m、さらに５×５ｍの小区画に分割し、それぞれアルファベットとアラビア数字を組み合わせ表記する方法を用いた（第５図）。

遺構面全体は測量業者委託によりクレーン使用の空中写真測量を行い１/50の図化作業を行った。遺構面、個々の遺構、土層断面などは35㎜カメラによるモノクロ、リバーサル撮影、６×７カメラによるモノクロ撮影を行った。

出土遺物は調査区、層位ごとに分類のうえ洗浄、注記、復元の各作業を経て、選別して実測を行った。また遺存状態の良好な遺物については写真撮影を行い、本報告書に掲載した。

註１）2004『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』７　大阪府教育委員会


K5-12-15I
X = −128.3
a
b
c
d
e
f
g
h
i
第 2 調査区
第 1 調査区
第 3 調査区
第 4 調査区
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
X = −128.4
Y = −41.4
K5-12
500m
K-5
X = −120
X = −150
X = −180
6km
8km
Y = −80
Y = −40
0 300km

第５図　調査区地区割図

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　調査の概要

今回の調査区の総面積は1,900㎡になる。

第Ⅲ章で触れたように掘削土仮置場の確保の関係から調査は全体を４分割して進めた（第１～４調査区）。西端に離れて設定した第４調査区は、その半分程度が近年の撹乱によって破壊されており、撹乱以外の部分においても遺構は旧耕土直下の地山面上で時期不明の小溝を確認するに留まった（第６図）。従って以下では第４調査区以外の調査区（第１～３調査区）についてその成果を記述していく。

重機によって盛土を除去した段階で二つの段によって画された計３面（調査区北西側半分を占める上段面、中央南側の中段面、東端の下段面）の水田面が姿を現した。段造成の時期を直接に示す資料には恵まれなかったが、大日本帝国陸地測量部発行の２万分の１地図「茨木村」（1885年測量）を見ると調査区周辺は既に水田表記が見られ、近世に遡るのは間違いない。さらに旧耕土（各段面の第１層）を除去すると、中世の遺物包含層・遺構が各面の端部付近を中心に確認された。それらは段築成の際に切土による破壊を免れた部分と考えられる。

中世包含層は各段で何層かに分層が可能であるが、何分にも分断された状態で確認されたため全体の連続性を追うことは難しく、以下では各段面ごとに層序を設定して概略を述べていく（第７図）。

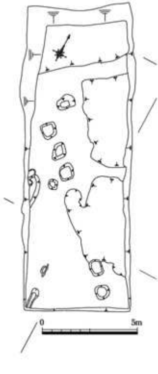
なお出土遺物のうち埴輪は第３節で、埴輪以外のうち包含層出土遺物は本節で、遺構出土遺物は第２節で報告する。[1]

上段面

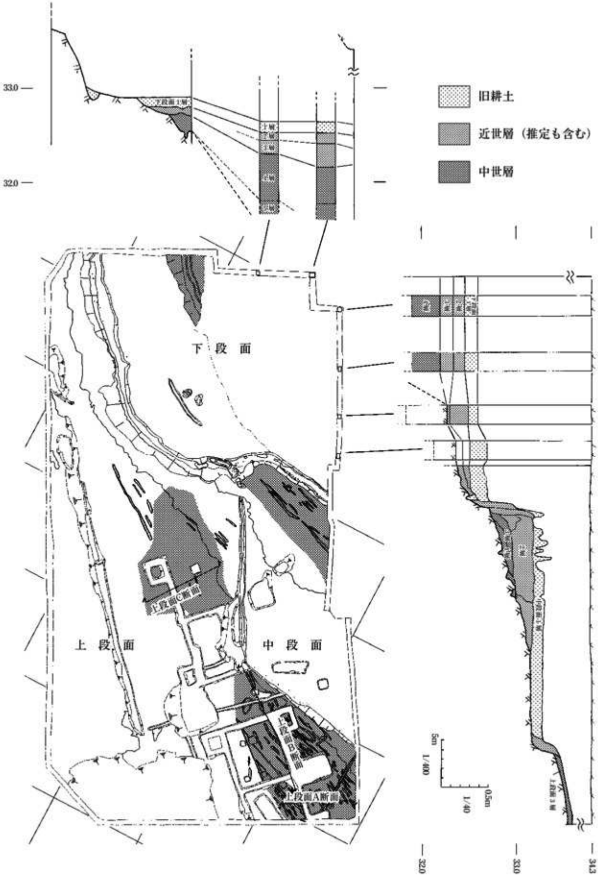
調査区の北部から西部にかけて広がる段面である。同面北半は包含層・遺構が全く検出されず、警察病院の造成に伴って削平されたようで、本来は背後の丘陵端部の傾斜面が広がっていたものと考えられる。それ以外の部分も建物の基礎の撹乱が縦横に走り、遺存状態はよくなかった。

中世遺物包含層が残存していたのは調査区南部・同中央部の上段面端部で、南部では３層、中央部では２層に分層し得た。両者が直接重なる部分は確認できなかったが、後述する遺構や遺物の検出状況から考えて中央部の２層の後に南部の３層が形成されたことはほぼ間違いないと見られる。したがって以下では南部の３層を上段面第２～４層、中央部の２層を同第５・６層として記述を進める。

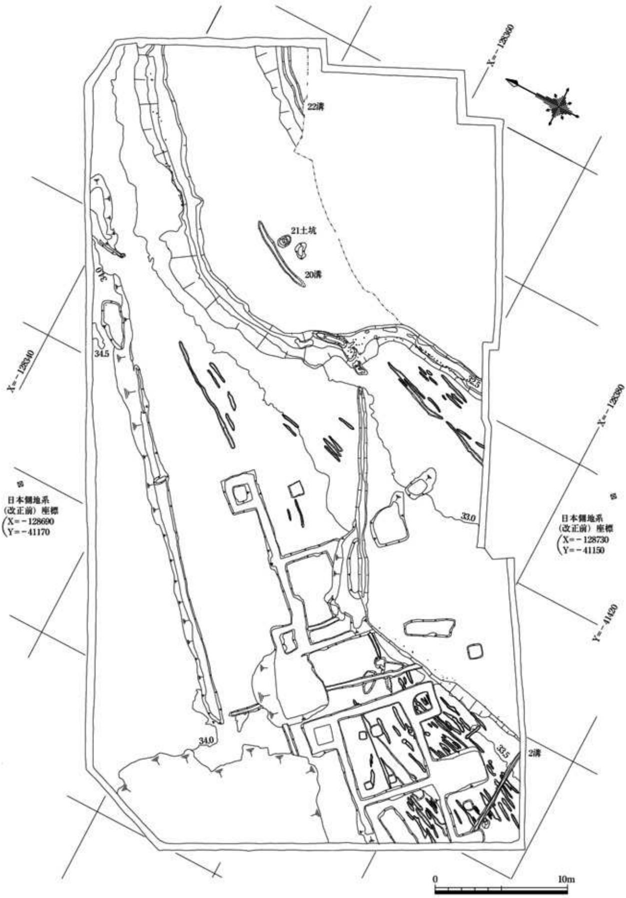
上段面第２～４層はいずれも中世遺物包含層である。同４層除去面（地山面）、あるいは同第２～４層中において耕作痕を検出しているため、これらの層は耕作に伴う土壌化層と考えられる。上段面第５層は明黄褐色粘質シルトのブロックを大量に含むオリーブ褐色シルト質細砂で、その厚さは30㎝に達する。層中からは多くの埴輪片以外に、少量の古墳時代の須恵器片、中世の瓦器片が出土している。上段面第６層は灰色シルト質細砂で、その厚さは20㎝である。層中からは埴輪片以外に古墳時代の須恵器片、平安期の土師器片がわずかに出土している。この２枚の層は、上段面端部の



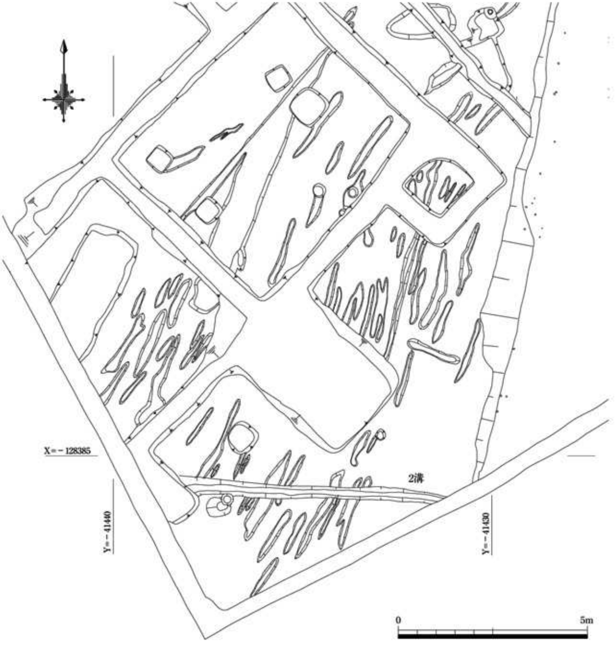
第６図　第４調査区全体図


旧耕土
近世層（推定も含む）
中世層
下段面
上段面
中段面
上段面C断面
上段面B断面
上段面A断面
33.0
32.0
34.3

第7図　基本層序模式図



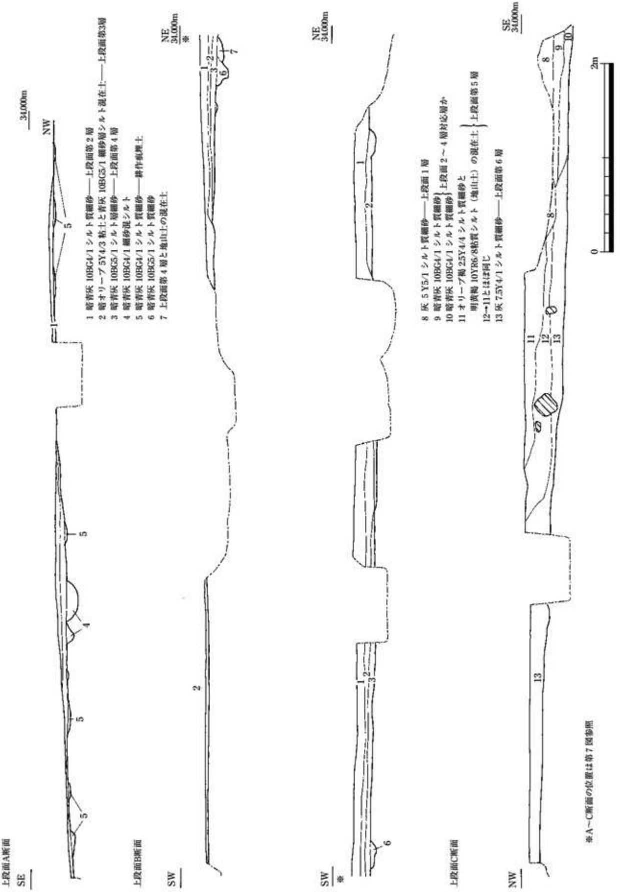
第８図　調査区全体図（第１～３調査区）



第９図　上段面南端部

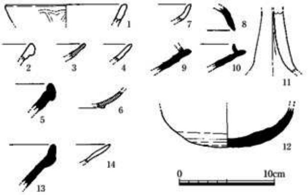
旧地形がわずかにくぼんだ部分に存在していること、あるいは５層上面で南部の地山上面、すなわち第４層除去面検出のそれと一連のものと見られる耕作痕を検出していることから、中世の開発に際して傾斜面の凹凸を均すために他所から運ばれてきた整地土層と考えるのが妥当であろう。ただ後述するように第６層上面、地山面（第６層除去面）においても耕作痕や遺構（24段）を検出しているため、その作業は一回に留まるものではなかったようである。

第11図１～６は第１～４層出土遺物である。１は１段部分の上段面第１層から出土した輸入青磁椀口縁部で復元口径は12.6cmである。灰白色の精良な胎土に明緑灰色の釉がかかる。外面に蓮弁文が認められる。14世紀。２は１段部分の第１層から出土した輸入白磁椀口縁部片である。灰白色の精良な胎土に黄灰色の釉がかかる。口縁は玉縁を呈し、外面口縁下端に刺突列点が認められる。11世紀後葉～12世紀初頭。３は上段面（15I-４h-Ⅰ区）第３層出土の瓦器椀口縁部片である。内面に粗いヘラミガキを施し、外面には指オサエが認められる。13世紀。４は上段面第３層出土の土師器皿口縁部の細片である。浅黄



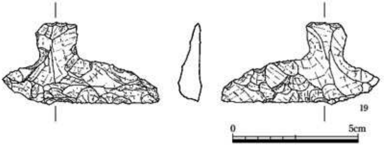
第10図　上段面2～6層断面図

色を呈し、内外面とも摩滅が激しい。５は上段面（15I-4h-Ｉ区）撹乱土出土の東播系須恵質土器の擂鉢口縁である。内外面とも灰色を呈し、焼成は良好である。回転ナデ成形で口縁端部は上下に拡張する。12～13世紀と考えられる。６は上段面（15I-3g-Ｉ区）第２～４層出土の瓦器椀底部である。灰白色を呈し、内面のみ炭素が吸着する。高台は高さ３㎜ほどで、断面は丸みを帯びる。13世紀と考えられる。



第11図　各層出土土器

７～12は第５・６層から出土した。７は15I-3g-Ⅲ区第６層出土の土師器皿の口縁部である。体部は屈曲し端部は丸く終わる。器壁は摩滅が激しい。色調はにぶい黄橙色を呈する。８は第２～４層中出土の須恵器杯蓋口縁部である。焼成は良好で灰白色を呈する。器面は摩滅しているが、内外面に回転ナデ調整が認められる。時期は古墳時代後期前葉（中村編年Ⅱ型式２段階）と考えられる。９・10ともに15I-3g-Ｉ区の第６層から出土した須恵器杯身である。両者は、内面の還元焼成が不十分でにぶい黄橙色を呈する点、受部が厚く端部を丸く収める点、あるいは内外面回転ナデ調整の後外面にヘラケズリを施す点は共通するが、10の方が全体に器壁が薄くシャープである。ともに古墳時代後期末（中村編年Ⅱ型式５段階）。11は15I-3g-Ⅲ区の第５層から出土した土師器高坏の脚部柱状部である。摩滅が激しく調整はよくわからないが、中空の内部に縦位の絞り痕が認められる。古墳時代。12は15I-3g-Ⅱ区の第６層から出土した須恵器である。器種は壷と推定される。焼成は良好で内外面とも灰色を呈する。回転ナデ後、底部にヘラケズリを施している。古墳時代後期前葉か。



第12図　石器

中段面

調査区の南東部に展開する面である。面の大半の部分では中段面第１層（旧耕土）直下に地山とみられる無遺物層が広がり、中・近世に形成されたと見られる層は面端部を中心に確認している。（中段面第２～４層）。灰色シルトを主体とする第３・４層からは、わずかながらも瓦器が出土しているため中世の耕作土と考えられ、オリーブ灰色中砂混シルトの第２層は遺物こそ出土しなかったが段築造後の近世耕作土と推定できる。第４層除去面、すなわち地山上面で北北東—南南西に主軸をとる耕作痕を確認している。

下段面

Y=－41,110ライン以東に展開する面で、遺物包含層は概ねY=－41,100ライン以東に残存していた。下段面東端部は掘削限界深度との関係で２層以下の面的な掘削は行えなかったが、南壁に４箇所、東壁に２箇所設けたグリッド部分等の調査の結果、旧耕土（下段面第１層）以下に段造築後の耕作土とみられる第２・３層（灰白色粘土）、中世遺物の包含層である第４層（灰色砂混粘土）・第５層（灰色シルト質細砂）を確認することができた。さらにいうならば、第４層は瓦質土器が出土している一方で瓦器

を確認していないため中世後半、第5層は瓦器が出土しているため同前半に形成された層と推定できる。また両層は調査区の南東隅に向かう形で傾斜していく状況が認められ、調査区の南方に存在した谷などの埋土の一部であった可能性もある。

遺構は20・22溝、21土坑を確認しているが、いずれも段造成前の中世のものと考えられる。

第11図13は14I-10e-Ⅱ区第4層出土の東播系の須恵質擂鉢で、灰白色を呈し、焼成は良好である。回転ナデ成形で口縁端部は上方に拡張し、内面には段が巡る。時期は12世紀と考えられる。14は14I-10e-Ⅲ区第4層出土の土師器皿口縁部である。にぶい橙色を呈し、焼成は良好であるが、内外面とも摩滅が著しい。体部上半はわずかに肥厚気味に外反する。16世紀と見られる。

第2節　検出遺構

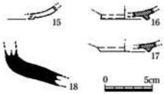
耕作痕（第9図）

上・中段面端部の地山面（上段面中央は第5層上面）において耕作痕を検出した。その規模は幅20cm、深さ2～3cmのものが多い。その方向は北東―南西と北北東―南南西に大別できる。上段面において、前者の耕作痕の南側に後者のそれが切り合うことなく広がる状況が観察された。両者の並存と同時に、北東―南西方向のそれが耕作域の北限を示す可能性を窺うことができる。

なお上段面第6層上面、同層除去面においても方向や形状を異にする耕作痕を確認し、さらには第2～4層掘削中にも耕作痕を若干検出しているため、上記耕作痕を前後する時期にも傾斜地において繰り返し耕作が行われていたようである。

耕作痕からは瓦器・土師器・須恵器・埴輪が出土しているが、その量は極めて少なく、いずれも小片である。第11図15は上段面（15I-4h-Ⅰ区）出土の瓦器椀底部である。灰白色を呈し、表面に炭素の吸着は認められない。高台は低い。16は上段面（15I-4h-Ⅳ区）出土の瓦器椀底部であるが、焼成は甘く土師質を呈する。高台は高さ0.5cmで、断面は台形を呈する。15は13世紀後葉頃に、16は12世紀頃に位置付けられよう。これらの遺物の知見から耕作痕の時期は中世前半に収まると考えられる。

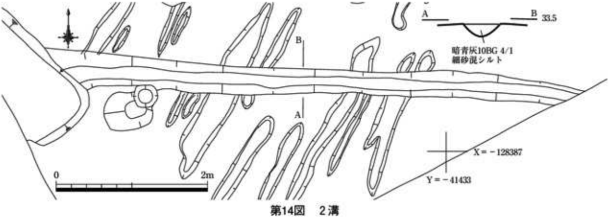
なお上段面15I-4h-Ⅰ区の耕作痕からは他に縄文時代の石匙が1点出土している（第12図19）。長さ6.2cm、幅3.2cm、厚さ1.0cmのサヌカイト製である。重さ11g。



第13図　遺構出土土器

2溝（第14図）

上段面の調査区の南西隅近く、15I-4i区で確認した検出長14.2m、幅0.4m、深さ15cmの溝である。東西方向に走り、その両端は調査区外に



第14図　2溝

伸びる。埋土は青灰色細砂混シルトである。

埋土から瓦器・須恵器細片が出土している。第13図17は瓦器椀底部であるが、焼成は甘く土師質を呈する。炭素の吸着も認められない。底部復元径5.2cm、高台高さ0.4cmで、高台断面は三角形である。13世紀頃と見られる。18は須恵器甕の体部上半片である。生焼けで灰白色を呈する。器面は摩滅が激しいが、外面は平行タタキ後カキメ調整、内面に同心円文が認められる。古墳時代後期かそれ以降のものであろう。

2溝は周辺の耕作痕を切って穿たれているが、両者の埋土の色調、質に大きな差はなく、その時期は耕作痕同様中世前半と推定できる。出土遺物の知見もその想定を否定するものではない。

20溝（第16図）

下段面、15I-1e区・-1f区で確認した、検出長5.4m、幅0.3～0.6m、深さ2cmの溝である。北東—南西方向にやや湾曲気味の伸び、その南西部はしだいに浅くなり終わる。遺物は出土していない。埋土は灰色シルト質細砂である。

21土坑（第16図）

下段面、15I-1f区で検出した、長径1.1m、短径0.8m、深さ0.4mの方形土坑である。底面、側面とも凹凸が激しい。埋土から埴輪・須恵器片が少量出土している。埋土は、灰色シルト質細砂の上層と、灰色中砂と灰色シルト質細砂の混在し人為的な埋め土と考えられる下層に大別できる。上層はすぐ西側の20溝埋土と酷似しており、両者の同時性が窺える。その時期については層位関係、遺物から特定できなかったが、中世と考えられる。

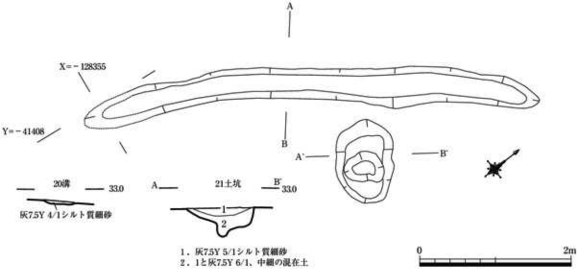
22溝（第17図）

下段面の調査区東端、14I-10e区で検出した、検出長5.0m、幅0.6m、深さ15cmの溝である。南の15I-10f区に続いていくものと考えられるが、その検出面が掘削限界以下となるため調査できなかった。埋土は、遺構の上部を覆う下段面第4層と同じ灰色粘土である。溝内から遺物は出土していないが、その第4層出土遺物からみて16世紀ごろのものと考えられる。

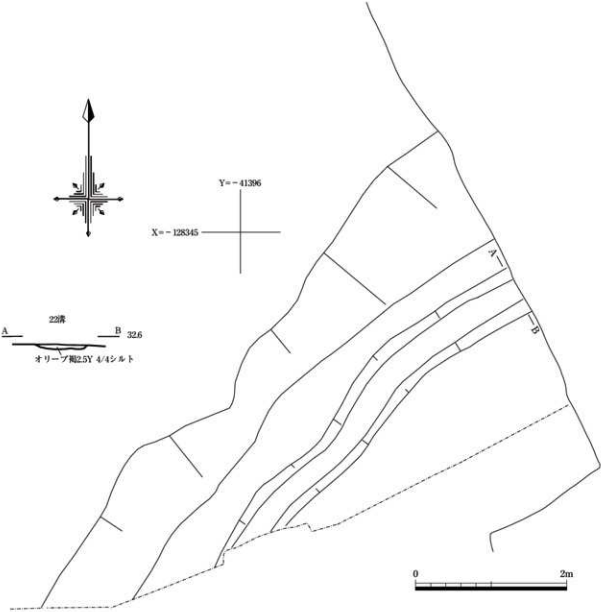
24段（第15図）

上段面の15I-2f・-2g区で確認した。北西から南東に緩やかに下っていく斜面をカットして造り出した南北長5.2m、東西長1.8m、深さ10cmの小規模な段である。上段面第6層を除去した段階で確認したもので、遺構内の埋土もその第6層がそのまま充填していた。底面で南北方向に走る細い線上の耕作痕を数条確認した。埋土から瓦器片が1点出土している。耕地の区画に関連する遺構であろう。6層除去

第15図　24段



第16図　20溝・21土坑



第17図　22溝

面で確認していることから、当調査区で確認された耕作痕の中では最も初期のものと推定できるが、同面ではこの24段床面以外には耕作痕は認められないことを勘案するならば、その範囲はかなり限られたものであったようである。

第3節　出土埴輪

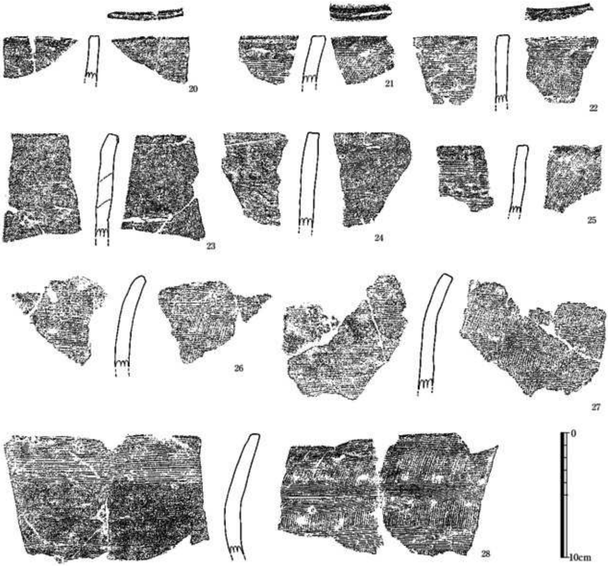
概　要

今回の調査では計503片、7,159gの埴輪が出土している。いずれも円筒埴輪で形象埴輪は確認していない。また出土状況は2次堆積の様相を呈し、原位置は不明である。調査区各所の中近世包含層または近年の撹乱から出土しているが、旧水田の上段面中央部の上段面第5・6層、とりわけ第5層に集中しており、埴輪出土総量に占める両層出土埴輪の割合は点数・重量とも47%（238片、3,330g）に上る。

出土埴輪はその調整等から以下のAB二類に大別できる。

A類埴輪（第18図20〜28、第19図29〜44、第21図49〜52）

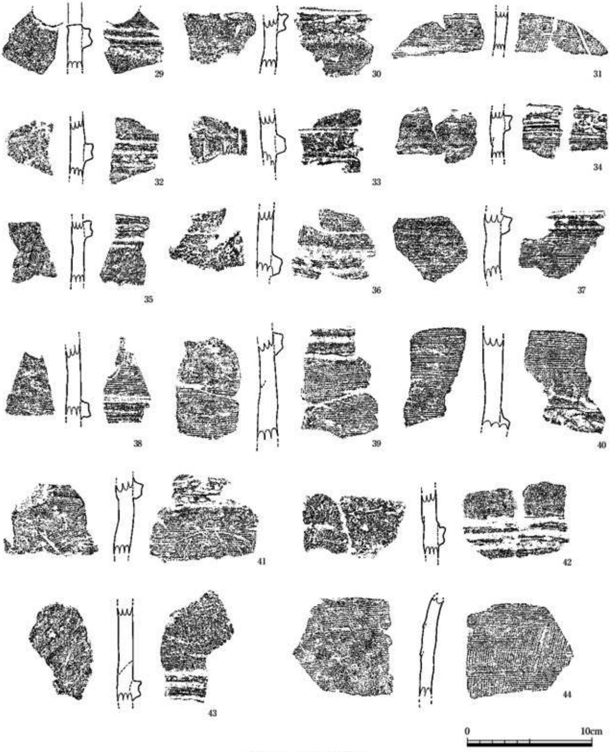
硬質焼成の埴輪である。外面縦ハケ（1次調整）と突帯の貼付後、工具が器壁面で静止せずに一気に突帯間を1周する所謂C種横ハケ（2次調整）を施すものが圧倒的で、内面は横方向のハケ後、指でナ



第18図　出土埴輪（1）

デるものが多い。突帯は幅1.5cm、高さ0.8cmほどで、その断面は台形に近いが、上面はややくぼむ。埴輪出土総量に占める割合は点数で30%（151片）、重量で55%（3,917ｇ）である。

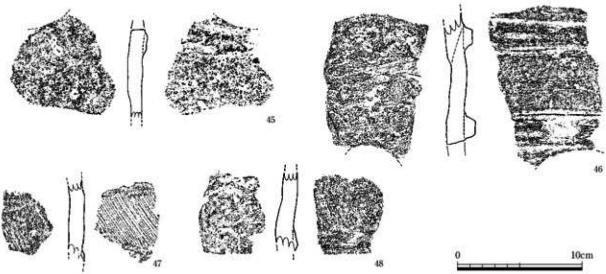
第18図20～28はいずれも幅0.7cmほどの面をなす端部およびその付近と見られる破片である。
20はやや軟質で明赤褐色を呈する。端面はややくぼみ、内面には横方向のナデが認められる。21は赤褐色を呈し、端面は横ナデ調整を施す。22は内外面とも暗赤灰色であるが、内部は暗赤褐色を呈している。23はやや軟質で明赤褐色を呈する。端部は板状の工具で面取りしたものと見られ、その際にはみ出した粘土を外表面に押しつけている。また内面は横ハケを指オサエおよび横方向のナデで消している。24は



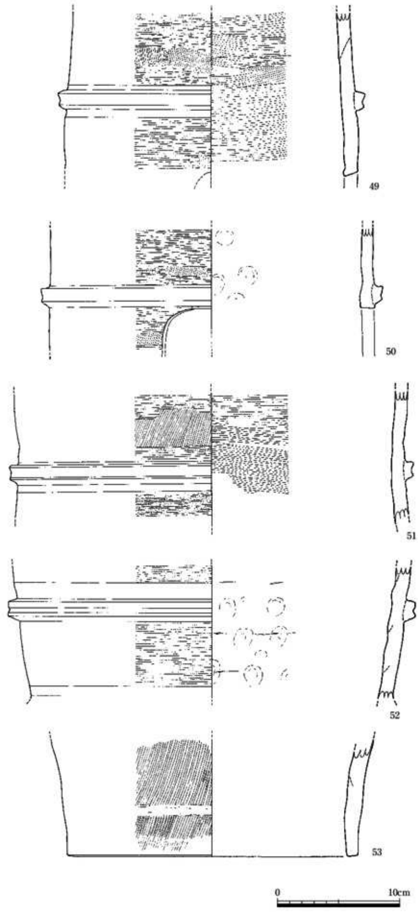
第19図　出土埴輪（２）

全体に青黒色を呈するが、表面の一部は暗赤灰色に変色している。内面は横ハケを指オサエおよび横方向のナデで消している。25は灰色を呈するが、内面は赤褐色。端部に横ナデ調整を施し、内面の一部に指オサエ痕が残る。26は赤褐色だが外面は暗赤褐色に変色している。なお端面付近と見られる部分のみ赤褐色を呈し、軟質である。27は全体に暗赤褐色を呈するが、外面のみ黒褐色である。内面に指オサエ痕が残る。28は暗灰色を呈するが、表面の一部にやや赤みを帯びる部分がある。内面は全体に施した横ハケを横方向の板状の工具を用いて消している。外傾気味に広がるが、全体に歪みが非常に激しい。

第19図29～44・第21図49～52は体部を中心とする破片である。29は内部は暗緑灰色だが、内外とも表面は明赤褐色を呈する。内面全体に指オサエが残り、円孔が認められる。突帯上面はやや深くくぼみ、断面はM字に近い。30は暗赤褐色を呈するが外面は暗赤灰色である。摩滅が激しいが内面に指オサエが認められる。突帯上面は指で強く横ナデを施しており、断面はM字に近い。31は内部明赤褐色であるが、表面は内外とも赤褐色あるいは灰赤色を呈する。外面に１条のヘラ描沈線が認められ、内面は横ハケを指でナデ消している。32はやや軟質で赤褐色を呈する。摩滅が激しいが内外とも横方向のハケが認められる。33は明赤褐色を呈する。摩滅が激しい。内面に縦位の工具痕が認められる。突帯は上面が平坦で肉厚である。34は暗赤灰色だが、内外面は各々赤褐色、暗灰色を呈する。内面に指オサエ痕が認められる。35は表面は灰色だが、内部は赤褐色を呈する。内面は指ナデが認められる。36は明赤褐色を呈する。摩滅が激しい。37は暗青灰色だが、外面はにぶい赤褐色を呈する。内面は横ハケを指でナデ消している。38は赤褐色を呈するが外面は黒褐色である。内面は横ハケを指でナデ消している。39は明赤褐色を呈する。全体に肉厚である。全体にやや摩滅するが内面は横ハケを指でナデ消している様子が見てとれた。40は赤褐色を呈する。全体に肉厚で、突帯には体部との接合痕が顕著に残っている。内面の一部に指オサエ痕が認められる。突帯は高さ0.5cmほどでやや扁平である。内面の一部に接合痕が認められる。41は明赤褐色を呈する。内面は横ハケ、斜メハケを一部指でナデ消している状況が観察しえた。42は胎土内部については暗褐灰色を呈するが、内外とも表面は赤褐色である。全体にやや摩滅する。突帯は高さ0.5cmほどでやや扁平である。内面の一部に接合痕が認められる。43は胎土内部については黒色を呈するが、内外とも表面はくすんだ赤褐色を呈する。全体に摩滅している。内面は斜メハケを指でナデ消している。44は暗青灰色だが、内面は暗赤褐色を呈する。残存部上端は赤褐色を呈し、軟質であることから



第20図　出土埴輪（３）



第21図　出土埴輪（4）

端部に近い部分と考えられる。内面は横ハケを縦位指ナデで消している。また内面の一部には接合痕が残る。

第21図49は復元最大径24.0㎝で、下端に円孔の一部が認められる。色調は赤褐色だが、外面は灰赤色に変色し、ややくすぶった観を呈する。内面は横ハケを一部指でナデ消しており、接合痕も認められる。50は復元最大径27.0㎝で、色調は青黒色を基調とするが、内面は暗紫灰色に、外面はにぶい赤褐色に変色する。円孔が1孔認められる。内面は全面に指オサエが残る。51は復元最大径31.8㎝で、色調は赤褐色を基調とするが、外面は緑黒色に変色する。内面は横ハケを一部指でナデ消している。52は復元最大径32.0㎝で、ほぼ直線的に外傾して開く。色調は赤褐色だが、内外とも表面は灰赤色に変色し、ややくすぶった観を呈する。内面にはハケ調整が認められず、指ナデ痕や接合痕が顕著に残る。なお本例はA類埴輪の中で突帯が2条認められる唯一の例であり、その間隔（下帯上端～上帯下端）

は5.7cmである。

B類埴輪（第20図45～48、第21図53）

軟質焼成の埴輪である。外面に縦ハケもしくは斜メハケを施した後突帯を貼り付ける。２次調整は行わない。突帯は粘土紐を貼り付けただけの低いものが多い。全出土埴輪に占める割合は点数で70%（352片）、重量で45%（3,242g）である。

45は明褐色～灰白色を呈し、突帯は指で強く押さえつけており、高さは0.2cmほどに過ぎない。内外面とも摩滅が非常に激しいが、内面の指オサエがかろうじて認められる。胎土にはチャート、長石をはじめとした砂粒を非常に多く含み、粒子の大きなものは長さ７mmにも達する。円孔が認められる。46は全体に肉厚な埴輪で、明赤褐色を呈する。摩滅が激しく調整等はよくわからないが、内面は指ナデによる凹凸が激しく接合痕が認められる。高さ0.7～0.9cmの断面台形の突帯が２条認められ、その間隔は4.8cmである。円孔が認められる。47はにぶい黄橙色を呈し、内外面ともに斜メハケ調整が認められる。資料の上下端に突帯の一部もしくは突帯貼り付けの際の横ナデ調整が認められ、突帯間の距離が5.3cmであることを知り得た。48は明褐色～灰白色を呈しており、突帯は指で強く押さえつけており、高さは0.3cmに過ぎない。内外面とも摩滅が激しいが外面斜めハケ、内面指オサエが認められる。53は明赤褐色を呈する最下段と見られる資料である。外面は斜メハケ後、下端部とそれより約３cm上方に板状工具を用いたとみられる横方向のナデを施している。内面には接合痕と横方向のナデが認められる。

註１）　本書における遺物の編年、観察においては以下の文献を参照した。

輸入磁器；2000『大宰府条坊跡』XI　太宰府市教育委員会

瓦　　器；森島康雄1995「瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

須 恵 器；1978『陶邑』Ⅲ　大阪府教育委員会

東播系須恵器；神崎勝・德原多喜雄・山仲進1989「神出窯における系譜、構造、編年」『神出1986』妙見山麓遺跡調査会

埴　　輪；川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学会

第Ⅴ章　まとめ

第１節　古墳時代

埴輪の考察

第Ⅳ章で触れたように今回の調査では503片、7,159ｇの埴輪が出土し、それらはその焼成、調整等の異同からＡＢ二類に大別した。

硬質のＡ類に関してはその調整に斉一性が認められるのであるが、その色調は赤褐色から黒灰色まで実に多様である。一破片の内外面で色調が全く異なるものも珍しくない。これらの様相は焼成時の諸条件、特に酸化炎焼成・還元炎焼成の差に起因するものであろう。このような色調の多様性に、焼け歪んだ個体（第18図28）の存在をも合わせて考えるならば、こと焼き上がりの状態に関しては統一性への配慮は感じられないと言わざるを得ない。ちなみに外面の色調・焼成状態に着目すると、灰色系の還元炎焼成と赤色系の酸化炎焼成の割合は１：３（重量比）である。

Ａ類埴輪の調整に強い斉一性が認められ、あまり表面が磨滅していないことを重視するならば調査地から極めて近い場所にその消費地（古墳）があったと推定してもあながち誤りとは言えないであろう。さらにその彼地を推定する手がかりとなるのは埴輪が集中的に出土した上段面第５・６層である。第Ⅳ章において両層を中世の耕地拡大に伴って他所から運ばれてきた人為的な整地土と推定した。そうであるならば、両層の土は、余分な労働を排するために調査地の下方ではなく、上方すなわち北方の丘陵上で採土されたもので、その際破壊した古墳に並べられていた埴輪も同時に運ばれてきたと考えるのが自然であろう。従って古墳は北方の丘陵上に存在した可能性が考えられる。今回の調査区の南側（下方）で大阪府教育委員会が実施した第１・２次調査で埴輪が殆ど出土していないことも消極的ながら以上の想定を補強している。

埴輪の時期

次に出土埴輪の編年的位置付けを考えてみる。

工具が器壁上を静止せずに突帯間を一気に１周するＣ種横ナデをＡ類埴輪の特徴の一つとしたが、それは尾張地方に顕著に認められるものの畿内では類例が少なく、周辺では福井遺跡の西方12㎞の兵庫県川西市勝福寺古墳が知られているに過ぎない。

勝福寺古墳は大阪・兵庫府県境を南流する猪名川右岸（西岸）に位置する全長約40ｍの南面する前方後円墳で、前方部の木棺直葬２基の他に横穴式石室が２基確認されている。早くから北向きに開口する後円部の第１石室は、全長8.94ｍの右片袖式で、石室内からは画文帯神獣鏡、馬具等が出土している。2003年の調査で確認された第２石室は、基底部を残すのみであったが、後円部の北側に、後円部盛土と第１石室羨道閉塞土を切って構築されていることが判明し、石室内からは多量の須恵器が出土した。
勝福寺古墳から出土した須恵器は墳丘出土のものがⅡ型式１段階〜同２段階、第２石室出土のものがⅡ型式２段階と考えられるため、古墳築造、ひいては埴輪の樹立はⅡ型式１段階頃と推定されている。[1]

ところで今回福井遺跡で出土した埴輪と勝福寺古墳の埴輪は、ともにＣ種横ハケが認められるとはいえ、福井例の横ハケは各条線が明瞭で、その間隔も均質であり、須恵器のカキ目を彷彿とさせるものであるのにのに対し、勝福寺例は各条線が浅く、その間隔にもばらつきが認められるものが大半を占める点、福井例では器壁に殆ど隙間を残さないまでに横ハケを施すのに対し、勝福寺例では１次調整の縦ハ

ケが残る部分も多い点、さらには福井例ではC種横ハケが硬質のものに限って認められるのに対し、勝福寺例では軟質、硬質の両者に認められる点など相違点も多い。[2] また埴輪全体の焼成状況を見ても福井例では軟質、硬質の埴輪の比率がほぼ拮抗するのに対し、勝福寺例は軟質埴輪が圧倒的多数を占めているのである。

このように細部においては相違点もあるものの、ここでは硬質埴輪の存在、C種横ナデの採用といった共通点を重視し、A類埴輪の時期を勝福寺古墳同様Ⅱ型式1段階に位置付けておきたい。

なおB類埴輪については、A類埴輪との関係を含めて今回の資料からは詳しく追究できなかったが、すでに2次調整を欠いており古墳時代後期のものであることは間違いないであろう。

第2節　中世以降

今回の調査区では鎌倉時代（13世紀頃）と推定される耕作痕を確認しており、丘陵部から平地に至る緩斜面上においてこの時期に耕地化の進んだことが窺える。第Ⅳ章で推測したようにその際に斜面の凹凸を整地によって平坦化されたことも明らかになった。大阪府教育委員会による第1次調査おいても、平安時代に河川であった部分が鎌倉時代には耕地化しており、[3] 限られた面積の調査成果からではあるが中世前半に耕地（畑地）面積が拡大したことは指摘できそうである。

その後、おそらく近世に行れた大規模な造成によって、現在見られる水田の景観が形成されていったのであろう。

註1）寺前直人編　2004「調査報告　勝福寺古墳発掘調査概報」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科、2004『勝福寺古墳現地説明会のしおり』川西市教育委員会　大阪大学大　学院文学研究科考古学研究室

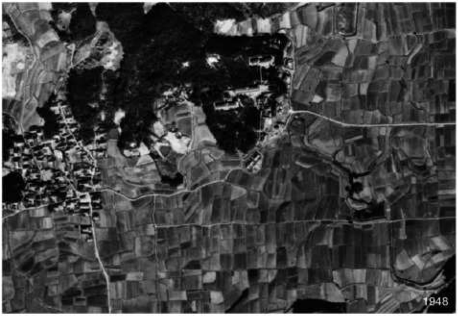
2）少数確認された勝福寺古墳の硬質埴輪にはカキ目状の横ハケが認められる。

3）2003『福井遺跡』大阪府教育委員会

第1表　出土埴輪観察表

遺物番号	出土位置	色調 外面	色調 内面	調整 外面	調整 内面	焼成	その他
20	15I-4h-Ⅰ　撹乱埋土	明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色 2.5YR5/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ、指ナデ	縦ハケ後、指ナデ	硬質	口縁部
21	15I-3g-Ⅰ　上段面5層	赤褐色 2.5YR4/6	赤褐色 2.5YR4/6	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	横ハケ後、横ナデ	硬質	口縁部
22	15I-2f-Ⅳ　上段面5層	暗赤灰色 2.5YR3/1	暗赤灰色 2.5YR3/1	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ　口縁部は横ナデ後板ナデか	横ハケ	硬質	口縁部
23	15I-3g-Ⅱ　上段面5層	明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色2.5YR5/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ、指ナデ	横ハケ後、横方向ナデ	硬質	口縁部
24	15I-2f-Ⅳ　上段面5層上面	暗赤灰色 2.5YR3/1	暗赤灰色 2.5YR3/1	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ、指ナデ	横ハケ後、横方向ナデ	硬質	口縁部
25	15I-1f-Ⅱ　地山上面	灰色 N4/	赤褐色 2.5YR4/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ　口縁部横ナデ	横ハケ、指オサエ	硬質	口縁部
26	15I-2f-Ⅳ　上段面	暗赤褐色 2.5YR3/2	赤褐色 2.5YR4/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ、指ナデ	横ハケ後、指ナデ	硬質(口縁端部のみ軟質)	口縁部　機械掘削時出土
27	15I-2f-Ⅳ　上段面	黒褐色 7.5YR3/1	暗赤褐色 2.5YR3/6	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ　口縁端部横ナデ	横ハケ、指オサエ	硬質(口縁端部のみ軟質)	機械掘削時出土
28	15I-2f-Ⅳ　上段面	暗赤灰色 2.5YR3/1	暗赤灰色 2.5YR3/1	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	横ハケ後、板ナデ	硬質	全体に大きく歪む　機械掘削時出土
29	15I-3g-Ⅰ　撹乱埋土	明赤褐色 2.5Y5/8	明赤褐色 2.5Y5/8	2次調整;C種横ハケ、指ナデ	指オサエ	硬質	円孔あり
30	第2調査区	暗赤灰色 2.5YR3/1	暗赤褐色 2.5YR3/6	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	横ハケ、指オサエ	硬質	機械掘削時出土
31	15I-3g-Ⅰ　上段面5層	赤褐色 2.5YR4/8	灰赤色　2.5YR4/2	1次調整;不明、2次調整;C種横ハケ	横ハケ後指ナデ	硬質	外面にヘラカキの直線あり
32	15I-4h-Ⅰ　撹乱埋土	赤褐色 2.5YR4/8	赤褐色 2.5YR4/8	2次調整;C種横ハケ	横ハケ	硬質	
33		明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色2.5YR5/8	1次調整;不明、2次調整;C種横ハケ	板状工具によるナデ	硬質	機械掘削土出土
34	15I-2f-Ⅳ	赤褐色 2.5YR4/8	暗灰色 N3/	2次調整;C種横ハケ	横ハケ後、指ナデ	硬質	機械掘削時出土
35	15I-3g-Ⅰ　撹乱埋土	灰色 N4/	赤褐色 2.5YR4/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	指ナデ	硬質	
36	15I-1e　下段面	明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色 2.5YR5/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	摩滅激しく調整不明	硬質	
37	15I	にぶい赤褐色 2.5YR4/4	暗青灰色 5PB4/1	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	横ハケ後、指ナデ	硬質	機械掘削時出土
38	15I-2f-Ⅳ	黒褐色 5YR3/1	赤褐色 2.5YR4/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	横ハケ後、指ナデ	硬質	機械掘削時出土
39	15I-3g-Ⅱ　上段面5層	明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色2.5YR5/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ、指ナデ	縦ハケ後、指ナデ	硬質	
40	15I-3g-Ⅳ　上段面1層	暗赤褐色 2.5YR5/8	暗赤褐色 2.5YR5/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	横ハケ後、指ナデ	硬質	
41	15I-3f-Ⅲ　上段面5層	明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色2.5YR5/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ、指ナデ	横・斜めハケ後、指ナデ	硬質	
42	15I-3g-Ⅲ　上段面6層	赤褐色 2.5YR4/6	赤褐色 2.5YR4/6	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ指ナデ	摩滅激しく調整不明	硬質	
43	15I-3f-Ⅲ　撹乱埋土	赤褐色 5YR4/6	赤褐色 5YR4/6	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	斜メハケ後、指ナデ	硬質	
44	14I-1g　下段面1層	暗青灰色 5PB3/1	暗赤褐色 2.5YR3/2	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	横ハケ後、指ナデ	硬質	
45	15I-2f-Ⅳ　上段面6層	明褐色 7.5YR5/6	明褐色 7.5YR5/6	摩滅激しく調整不明	指オサエ　摩滅激しい	軟質	円孔あり
46	15I-3g-Ⅰ　上段面5層	明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色2.5YR5/8	摩滅激しく調整不明	指ナデ　摩滅激しい	軟質	円孔あり
47	15I-2g-Ⅰ　上段面6層	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	1次調整;斜めハケ、	斜メハケ	軟質	
48	15I-3g-Ⅰ　上段面6層	明褐色 7.5YR5/6	明褐色 7.5YR5/6	1次調整;縦方向ハケ、	指オサエ	軟質	
49	15I-2f-Ⅳ　上段面5層上面	灰赤色 2.5YR4/2	赤褐色 2.5YR4/8	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	横ハケ後、指ナデ	硬質	円孔あり
50	15I-3g-Ⅱ　上段面5層	にぶい赤褐色 2.5YR4/4	暗紫灰色 5P3/1	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	指オサエ	硬質	
51	15I-1f-Ⅱ　下段面	緑黒色 5G2/1	暗赤褐色 2.5YR3/2	1次調整;縦ハケ、2次調整;C種横ハケ	横ハケ後、指ナデ	硬質	
52	15I-3g-Ⅰ　上段面5層	灰赤色 2.5YR4/2	灰赤色 2.5YR4/2	2次調整;C種横ハケ	指オサエ後、横方向ナデ	硬質	
53	15I　上段面3層	明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色2.5YR5/8	1次調整;斜メハケ後、一部横方向板ナデ	板状工具による横方向ナデ	軟質	下端部

図　　版



1．調査区西部（第1調査区）全景（北より）

2．調査区北東部（第2調査区）全景（東より）

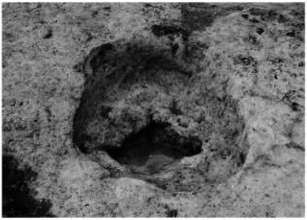
1．第4調査区（北西より）

2．上段面2～4層断面（東より）

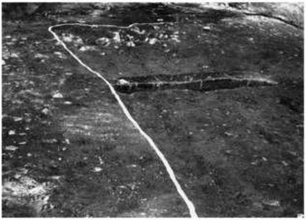
3．上段面5・6層断面（南西より）

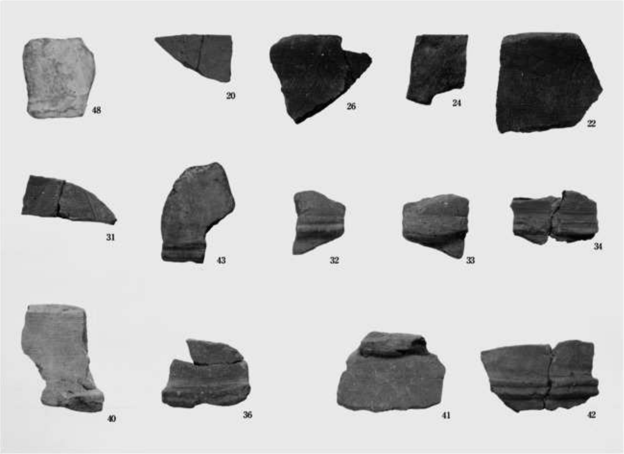
4．20溝・21土坑（南より）

5．21土坑断面（南東より）

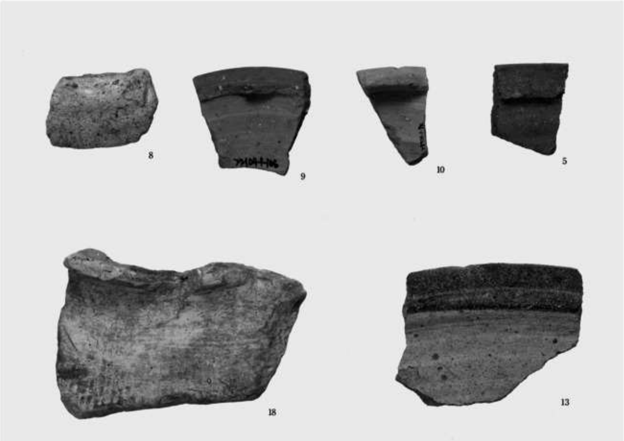

6．21土坑（南東より）

7．22溝（北東より）

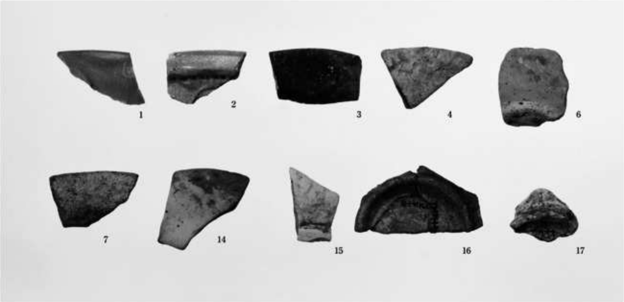

8．24段（南より）



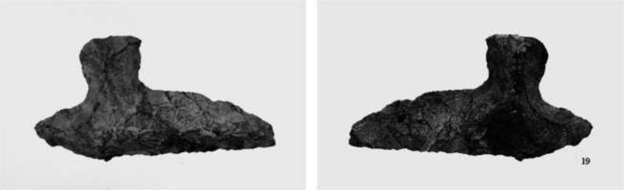
1．埴輪



2．須恵器



1．磁器・瓦器・土師器



2．石器

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふくいいせき
書名	福井遺跡
副書名	大阪第二警察病院増築工事に伴う福井遺跡04－1調査報告書
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第134集
編著者名	山元 建
編集機関	(財)大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105 堺市竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791
発行年月日	西暦2005年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村名	遺跡番号					
ふくいいせき 福井遺跡	いばらきしむろやま 茨木市室山 1丁目	27211	127	34° 50′ 18″	135° 33′ 00″	20041201～ 20050228	1,900㎡	大阪第二警察 病院増築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福井遺跡		縄文		石匙	
		古墳		埴輪、須恵器	周辺に古墳が存在した可能性がある。
	田畑	中世	耕作痕	瓦器、土師器、磁器	

要約	・石匙の出土から遺跡の初源が縄文期に遡ることが確認できた。 ・埴輪が計7kgほど出土した。硬質のもの(A類)と軟質のもの(B類)に大別できA類埴輪は2次調整(横ハケ)を施すが、B類埴輪には認められない。これらの埴輪は北側の丘陵上に存在した古墳に樹立されていた可能性がある。A類埴輪はその焼成状態、調整技法から須恵器工人の関与が想定され、類似する資料は周辺では兵庫県川西市勝福寺古墳(後期初頭)で確認されている。 ・中世の遺物包含層と耕作痕・溝他を確認し、調査区周辺が中世前半を中心に畑地として開発されたことが窺えた。調査区南東部は中世まで谷状に落ち込んでいた可能性がある。

（財）大阪府文化財センター調査報告書 第134集

福　井　遺　跡

大阪第二警察病院増築工事に伴う

福井遺跡04－１調査報告書

発行年月日／2005年９月30日

編集・発行／財団法人　大阪府文化財センター

大阪府堺市竹城台３丁21番４号

印刷・製本／株式会社　中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南２丁目６番８号